

Title	ハイデガーと現代の思惟の根本問題( Abstract_要旨 )
Author(s)	吉本, 浩和
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	1997-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/202377">http://hdl.handle.net/2433/202377</a>
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

氏 名	よしもとひろかず 吉本浩和
学位(専攻分野)	博士(人間・環境学)
学位記番号	論人博第1号
学位授与の日付	平成9年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	ハイデガーと現代の思惟の根本問題

論文調査委員	(主査) 教授 竹市明弘	教授 有福孝岳	助教授 新宮一成
--------	-----------------	---------	----------

### 論文内容の要旨

『ハイデガーと現代の思惟の根本問題』と題するこの論文は、前期から後期に至るハイデガー哲学の全体を、存在の問いという彼自身の問題構成から一旦離れて、自己、他者、物、自然、言語という、古来哲学の基本問題とされてきた五つの問題に立ち帰って再構成すると同時に、それらを問うハイデガーの立場を、生命倫理、他者論(社会性)、現代文明論(物の消費)、環境倫理(自然と文化)、言語論という現代の問題意識からの照射によって解明することを試みたものである。

第一章は、「人間存在の全体性への問いと『存在と時間』における死の問題—人間存在の根源的規定を目指して—」と題される。知の確実な基盤を求め純粹意識の領域へと還帰するフッサール現象学に対してハイデガーは、人間存在についての第一義的経験たる死の先駆的理解に定位することによって、人間の全体性を分析しようとする。死の理解が選ばれたのは、死の欠如性にあらわに注目することによって逆に人間の全体存在が開示されるからであると申請者は言う。死の理解によって獲得された世界内存在としての人間の全体性に基づき、「理性的動物」という伝統的人間観を前提する現代の生命倫理学を、申請者は根本から批判する。

第二章「『決意性』と本来的他者経験の可能性」は、ハイデガー哲学の弱点と言われる他者論の解釈を通して、現代社会における他者論の積極的な可能性を探っていく。「単独的実存」という在り方を重視する『存在と時間』が一種の独我論的な傾向を持っていることは否めず、ハイデガー自身も「実存論的『独我論』」という表現さえ採用している。しかし彼は、他者と「共に在る」ことを人間存在の本質的な契機として捉え、しかも他者への「本来的」な顧慮としての「率先垂範的顧慮」なるものにもわずかに言及している。申請者はこの「率先垂範的顧慮」を、他者の実存を他者固有のものとして承認するような他者関係として解釈し、自己への決意性を、かかる他者関係を自己の可能性として引き受ける態度として捉える。このようにして本来的他者関係と「実存論的『独我論』」とが本質的に結びつく論理が解明され、この結びつきの中に、他者を他者として解放する可能性の存することが明らかとなる。これを通して、他者との本来的連帯と個人の真の自律との両立可能性という現代社会の課題が追究される。

「ハイデガーにおける物の超越性の問題と現代社会の危機」と題される第三章では、『存在と時間』から後期ハイデガーの「物」論文に至る彼の思想の展開が「物の超越性」という一貫した観点から解釈し直され、それを通して彼の思惟の「転回」の意味が、人間以外の存在者即ち「物」の復権という視点から解明される。対象や道具の存在に関する『存在と時間』の解釈を、存在者に対する人間の超越論的な優位を示すものと見た上で、「転回」以降における「芸術作品」及び「物」に関するハイデガーの思索を分析して、人間を超越する存在者の在り方が摘出される。以上の問題連関の中で、物の超越性をそれ自体として把握することが可能かという原理的問題が考察され、その一つの可能性を、後期ハイデガーの方法論についての分析を通して、現象学の解釈学的補完の中に求めている。

第四章「エコロジー倫理としての詩人的な“住い”」では、自然の中での人間の住い（Wohnen）という問題が、後期ハイデガーの言う「詩人的な住い」についての解釈を中心として論じられ、これを通して現代の環境思想への根本的な問題提起がなされる。ハイデガーは西洋文明の原初である古代ギリシア思想への「歩み戻り」を通して、「大地の荒廃」の根底にあるものを、ロゴスとピュシスとエートスの根源的連関の分断の中に見出し、この連関の中に開示されるべき人間的住いの探究を「根源的倫理学」と名づける。本章は、このような「住い」概念が形成される論理を前期から後期にかけての住い概念の変遷の分析を通して明らかにし、「詩人的な住い」が、科学技術をも包括しうような人間の全体的生を求めるものであることを、ハイデガーのテキストに即して解明する。

第五章「存在と言葉—ハイデガーにおける言語論的『転回』—」は、『存在と時間』において曖昧な位置しか与えられていなかった「言葉」が、中期以降どのようにして中心問題として浮上していくかが追究される。存在について語る言葉とそういう言葉の存在との重層的循環への躍入として、中期から後期に至るハイデガーの思惟の展開が解釈され、その躍入の到達点として、言葉の本質たる「言」と存在の本質たる「示し」とが共振する根本経験が位置づけられる。本章の考察を通して明らかになることは、ハイデガーにおける言語論の展開が、解釈学的方法と現象学的方法とが重層的・相関的に、渾然と一体化されながら展開される過程であるということであり、この解釈を通して、「物」や「住い」の問題が、人間と世界との全体にかかわる言葉のエレメンタールな力の回復への問いと一つのものであることが解明される。

### 論文審査の結果の要旨

『存在と時間』公刊以来、ハイデガーの研究文献は文字通り汗牛充棟をなすが、用語と思想の難解さの故に、その大半が理解のための解説的研究であり、彼の思想を実存哲学、現象学、解釈学等に分類したり、東洋思想との親近性から理解したりするという試みに終わっていた。全集の公刊によって若い頃の講義録が手にし得るようになると、古典哲学からの影響を追証する業績が山積し、社会的活動が問題になるとイデオロギーによる解釈が数多く出現した。しかし彼の「問いを取り上げて、自ら共に問い、就中彼よりも一層徹底的に問うこと」を試みた研究は数えるほどしかないと言ってよい。我が国の三宅、西谷、欧米のガーダマー、アーペル、シュミッツ、サルトル、ローティ等であろうか。

しかしハイデガーが死の数日前、彼の全集のために書き記した標語は、「諸々の道であって、著作に非ず」とある。彼は自分の作品に対する影響を調べあげたり、解説を記すことなどではなく、彼の思惟を通

して、彼の思惟を乗り越えることを求めているのである。我々はそのような試みの一端につらなる研究を、本論文に見出すことができると考える。

本論文の特色は、まずハイデガー自身が立てた主導的な問いである「存在の問い」を括弧に入れた上で、彼の哲学の全体を普通の哲学の言葉で再構成し、これと現代世界の根本問題とを照らし合わせることによって、ハイデガーの思惟の全体構造とそれが現代に対して持つ意義とを明らかにしたことである。

「存在の問い」を括弧に入れることは、通常のハイデガー理解からは異様に見えるが、存在問題というものが、そもそも西洋固有の言語と問題意識とから発していることを考慮すれば、そのような伝統を有さない我々が、存在の問いを除いて尚ハイデガー哲学が持つ普遍的意義について吟味してみることは重要であると考えられる。このような観点から申請者が示し得た研究成果を列举してみる。

1. 現象学的方法については『存在と時間』における有名な定義があるが、申請者は別の書でのハイデガー自身の示唆と彼の実際の事象分析とを吟味して、存在を日常隠しているところの存在者が欠如する経験にあらわな仕方で還帰するという仕方「還元」で、人間の全体性の現象学的な提示が行われていると指摘する。これは、ハイデガー自身が意識せずして使用していた現象学的方法の明確な摘出であり、現象学の今後の発展に大きく寄与するであろう。

2. サルトルをはじめとしたハイデガーの他者論に対する批判に対して、申請者は、ハイデガーのテキストから他者に関するわずかな言及を丹念に拾いあげ、他者論を独自に再構成し、それが持ち得る可能性を極限まで引き出し、本来の自己の獲得が本来の他者関係の必要条件であることを明らかにする。この研究によって申請者は、他者との本来の連帯と個人の真の自律との両立可能性という現代社会の重要課題の解決に哲学的な一歩を進めたと言えよう。

3. 申請者は、人間と存在との関係で見られてきたハイデガー哲学の前期から後期への「転回」を、人間と物との関係で見直し、前者の優位から後者の優位への転回であると見る。道具や対象としてしか扱われなかった「物」が、世界を担って現れること、申請者の言葉を借りれば、「強い意味での超越性」をもって出現すること、を明らかにしたハイデガーの後期思想に申請者は、物の消費に終始する現代文明を超克する道を見出している。ハイデガー哲学全体をこのような見地から一貫した体系として構成したことは、本論文の優れた特色であるが、問題は我々に対してそのような物の出現がどのようにして可能かということであろう。

4. 近年、ハイデガーとエコロジー思想とを結びつける研究が若干見られるようになってきているが、第四章はそれらの成果を踏まえつつ環境問題に対してハイデガーの思想が持ち得るぎりぎりの可能性に迫っている。その成果は鬼頭秀一氏との討論に示されており、地域文化によって環境問題を解決しようとする鬼頭氏に対して、申請者が、環境問題の文明論的普遍性を主張することは、説得力を持っている。

5. 申請者はテキストの綿密な分析を通して、『存在と時間』から「存在史」への「転回」を言語論的・解釈学的な転回として捉え、「存在史」を、歴史に現れた根本語を通して、歴史のエポックを画する概念枠へと迫るところの言語論的・解釈学的な努力であるとする。ついで後期ハイデガーの言語論の中に、存在を語る言葉とその言葉の存在との相即性の次元への思惟の深化を見出し、それを現象学と解釈学との相補的・重層的適用の到達点として位置づける。ハイデガー言語論の展開を、申請者は、言語をもって言

語の何たるかを語るという循環性の深化という一貫した観点から追跡しており、この点に申請者の独自性が見出される。

以上の考察において本論文は、ハイデガーの思惟を通して思惟しつつ、ハイデガー研究が陥りがちな存在思想の秘教化の弊を脱し、彼の哲学を思想のより広い議論の場に引き出すことに成功しており、狭義の哲学だけでなく人間・環境学の観点からしても優れた問題提起を行っている。議論をあくまで哲学的な地平の内に限定しようとする申請者の分析は、現代の諸問題との対決に関してやや形式的な議論にとどまった面も見られる。またハイデガー哲学と現代の根本問題との対決というその基本的関心からして、彼の哲学の糧となった哲学史上の諸家の議論との照合が十分でなかった面も見られる。これらの問題点を反省し、今後は、現在刊行の途上にあるハイデガーの講義録等を更に綿密に研究して、申請者が括弧に入れた「存在の問い」の、ハイデガー哲学及び哲学一般における正当性について、徹底した論究をなすと共に、ハイデガーの限界をも乗り越えるような視野から、人間・環境の諸問題に対してより立ち入った研究を行うならば、学界に裨益するところ大であろう。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成9年2月4日、論文内容とそれに関連した事項についての試問を行った結果、合格と認めた。